



ライティング支援連続セミナー 体験記

知識と言葉をめぐる冒険

自分を守る「情報リテラシー」情報の海でおぼれないために

中央図書館ラーニング・アドバイザー 松原 悠 (人間総合科学研究科)

2013/ 5/30(木) 15:30-16:30

セミナー講師：逸村 裕先生 (図書館情報メディア系)

今回のセミナーでは、論文やレポートにおいて、文献を探し、評価し、活用する方法を学びました。逸村先生によると、良いレポートとは、①書式を守る（表紙を付ける、本文のフォントを10～11ポイントに揃える、余白を30～35mmとる、ページ番号を付ける、など）、②序論、本論、結論の構成で書く、そして③文献を探し評価し活用する、が揃ったレポートです。この③について詳しくみていきます。

初めに、どうやって文献を探せばよいのでしょうか。文献を探す流れは、「情報要求→検索質問(サーチエンジンを選択する)→検索式(検索するキーワードを選択する)→検索された文献」となっています。目的の文献にたどりつくためには、情報要求に応じた適切な検索質問を選択し、情報要求に応じた適切な検索式を選択する必要があります。

次に、どうやって文献を評価すればよいのでしょうか。逸村先生は、「数をこなすしかない」とおっしゃいながら、そのヒントを教えてくださいました。「例えば、データが間違っていたり、データに対する解釈が突飛なものだったりする論文は、ダメです」。これは、7月11日の回で野村先生がおっしゃっていた、『『事実』と『意見』を区別する』こととつながります。事実を客観的に記述し、その事実に基づく意見を論理的に記述することが、良い論文やレポートの条件なのです。

最後に、どうやって文献を活用すればよいのでしょうか。その答えは、正しく引用することに尽きます。引用は、これまでに積み上げられてきた研究が、現在の自分が見ている視野を与えてくれているのだという、恩恵への感謝の表れです。また引用は、自分の論文やレポートの中で、他人の意見と自分の意見を区別する行為でもあります。学問分野やジャーナルごとに引用の「お作法」は異なりますが、少なくとも1件の論文やレポートにおいて一貫した作法によって、引用文献リストを付けることが必要です。



ここからは筆者が考えたことを述べます。先に示した「文献を探す流れ」は、「情報要求」という段階から始まりました。しかし、みなさんは自分の「情報要求」、つまり、何を知りたいのかを意識できているのでしょうか。

自分は何を知りたいのでしょうか。なぜ、それを知りたいのでしょうか。自分は何に喜びや怒りや悲しみを覚えるのでしょうか。そしてそれは、自分がどのような体験をしてきたからでしょうか。普段は無意識のうちに自分が感じていることを、意識しようとしてください。自分のことなのに、案外難しいのです。

このように、「情報要求」を生み出している自分という人間の性質を意識することこそが、論文やレポートにおける「問い」を明らかにする行為なのです。そして、この「情報要求」の説明が、論文やレポートの冒頭に書かれることになるのです。自分は何を考える人間なのか。なぜ、それを考えるようになったのか。これらを意識することが、論文やレポートの、ひいては自分の人生のテーマなのだと思います。

